

# 想像力の認識論的機能

## The Epistemological Function of Imagination

原田 広幸

### 問題意識の所在

想像力 (imagination/Einbildungskraft) は、人間の認識、特に日常的な経験的認識においていかなる機能を有しているか。これが本論文のテーマである。

日常的な言語使用において、「想像力」ということは、じつに様々な意味合いのもとに使われている。「彼女は想像力が豊かだ」とか「想像力の欠如がこのような凶悪な犯罪を引き起こした」などの表現がしばしば用いられることから、主に芸術的センスや道徳的センスに関することばとして、あるいはそのようなセンスの源泉となる基礎的な能力として理解されていることがわかる。大部分の人にとっての「想像力」とは、「芸術上の創造性、空想、科学上の発見、発明、新しさを意味する」<sup>1)</sup> のであって、認識論的な意義が顧みられることはほとんどない。

ジョンソンによれば、「想像力」のこのような理解は主として19世紀のロマン主義的芸術観の産物であるという<sup>2)</sup>。また、人間の認識や知識に関する理論において想像力の果たす機能を著しく低める動因となったのは、プラトニズムの伝統であり、そこにおいて「想像力」はどんな対象に関する知識についても真実をもたらさない、「最も低い認識の形式」とされてきたのである (もともと、プラトン本人の認識論がそのようなものであったかどうかは、ここでは論じない。それを明らかにするには、プラトンとその後プラトニズムの相違を詳細に論じる必要がある)。さらに、神経生理学等の知見の進歩を背景にした新しい認知心理学的立場からは、想像力を時代遅れの「能力心理学」の産物とみなす意見も多く存在する。

それでは、はたして想像力の機能を芸術的あるいは道徳的な次元でのみ発揮されるものと理解するのは適切であろうか。言い換えれば、人間の認識において、想像力の発揮する領域は、創造的なものに限られるのであろうか。

私は、こういったロマン主義的想像力観、プラトニズム的想像力観に反して、想像力のより広く根源的な機能を明らかにしたいと思う。すでにジョンソンは、認知言語学者のジョージ・レイコフとのメタファに関する共同研究の成果として、意味論上の想像力の根源性を明らかにしようと試みている<sup>1) 2)</sup>。ジョンソンは以下のようなものとして想像力を捉えている。すなわち、「想像力とは、心的表象 (とりわけ知覚像、イメージ、イメージ図式) を組織し、有意味で整合的な統一体にする能力である」<sup>1)</sup>。したがって、「想像力には、『新しい秩序』を生み出す能力が含まれる」が、そこにおける「新しい秩序」とは、芸術や道徳における秩序のみならず、思考や判断、日常的な経験的認識まで含む根源的な秩序でありうるのである。私は、意味論においてジョンソンらが試みている想像力の復権に経験的認識の地平において解釈し、哲学史を跡付けることにより、力を添えてみたいと思う。

### 考 察

想像力は、日常のありふれた、経験的でありふれた認識においても必要不可欠な能力である。たとえば、朝起きて歯を磨こうとして「歯磨き粉がない」ということに気が付いたとする (「歯磨き粉がない」ことの認識)。当然、大部分の人の一般的な「想像力」ということばの用法からすれば、この例において「想像力が発揮されている」とは言わないであろう。しかし、「(洗面所に行けば) 歯磨き粉があるだろう」という認識、「歯磨き粉がない」という認識、さらには「(目の前に) 歯磨き粉がある」という認識においてすら、想像力の働きは前提されている。つまり、「あるだろう」(未来における認識あるいは先取)、「(あったのに) 今はない」(過去の経験的認識あるいは想起)、さらに「いまここにある」(現在の経験的認識)において、想像力の発揮という契機は必要不可欠のものとなっている。

たしかに、大方の用法の同意する「芸術的諸表現行為」には想像力の発揮が必要不可欠であろうし、道徳的行為の前提にも他者の痛みについて想像力をめぐらすといった契機が存在しているだろう。しかし、それ以上に、認識の根源的な営みにおいても、想像力が重要な機能を担っているということは、過去のすぐれた何人かの哲学者が指摘してきたにも関わらず、忘れられている。想像力がなければ、われわれはごくわずかな行為すらも、単に動物的な反射というレベルのものを超えることはできない。思考や判断、つまり人間の認識の根源には、想像力の発動という契機が絶対不可欠であり、想像力こそあらゆる人間的活動の基礎となるべきものなのである。

以下、日常的な認識、つまり上にあげた「(洗面所に行けば) 歯磨き粉があるだろう」あるいは「歯磨き粉がない」、さらに「(目の前に) 歯磨き粉がある」という例におけるような経験的認識において、想像力はどのような機能を果たしているのかを、D.ヒューム、J.P.サルトル、そしてI.カントの議論を援用して考えてみたい。そして、カントの議論の根源性とその課題の提示を試みる。

### ヒュームにおける「想像力 (imagination)」

想像力ということばは、ながらく、人間の正確な認識を妨げる低次の能力として考えられてきた。事実、一部の哲学者にとっては、想像力は現実の仮象をもたらす気まぐれな能力に過ぎず、「認識の障害」とまで言うるものであった。たとえば、デカルトは「できるだけ注意して精神を想像力の描き出すものから遠ざけてやらねばならない」<sup>3)</sup>と述べている。この場合の想像力とは、物的な形像を思い描くこと(その力能)を意味しているが、それは「精神の吟味」を経ていない、幼少の頃から無根拠に受け入れてきた心像、または「私の承認なしに私のうちにやってきた観念」に過ぎず、こうした想像力の起源は単なる身体的反応や習性に由来する、とデカルトは考えたのである。

しかし世紀を隔てて、D.ヒュームとなると、想像力は「感官と経験とによって我々に供給された素材を合成し、移動し、増大し、ないしは減少する機能以上には達しない」としつつも、すぐれて多様で積極的な機能を有した、人間の認識的(また実践的側面にも)不可欠な能力であることを見て取っている。

「人間の思考というものは、あらゆる人間の権力や権威に屈しないばかりでなく、自然と実在の範囲

内に拘束さえされていないのであるから、これほど一見して無拘束なものはないように思われるかもしれない。・・・しかし、我々の思考が、このような無際限の自由を所有しているに見えるにもかかわらず、思考が実際にはきわめて狭い範囲に限られていること、そしてその一切の想像力が帰するところは、感官と経験とによって我々に供給された素材を合成し、移動し、増大し、ないしは減少する機能以上には達しないことを見出すであろう。我々が黄金の山を考えるとき、我々は『黄金』と『山』という我々が以前から親しくしていた2つの整合的な観念を結合するにすぎない。・・・要するに、思考するための一切の素材は、我々の外的感情か、あるいは内的心持ち(感情)に由来している。」<sup>4)</sup>

ヒュームにとっての想像力(imagination)は、あくまで経験的に供給された素材を組み合わせることをその本分としているが、その想像力によって我々は与えられた以上のことを語り、経験の所与を「超出」することにもなる。この「超出」こそが想像力の産物ということになるであろう。想像力を、すでに人間の中にある経験・記憶の中の組み合わせによって「新しいもの」を生じさせる能力と捕らえることは、ヒュームの考えからもうかがい知ることができる。

我々が「太陽が東から昇る」のを見たとき、問題になるのは、単に「太陽が東から昇る」のを見たことを事実として確認することではなく、どうして、「明日も太陽が東から昇るだろう」とか、「常に太陽は東から昇る」とか、このような判断を我々が下しうるのかということである。認識とは、単なる事実確認ではない。このような判断、つまり「常に」とか「必ず」といった観念を伴った判断が、認識にとっては欠かせない契機となっているのである。

しかし、このような「常に」や「すべて」に対応する事態は、経験そのもの(我々が「太陽が東から昇る」のを見た、その経験)には存在しない。それを生ぜしめるのが想像力の機能であり、ヒュームが問題にしたテーマもそこに存在した。

ヒュームは、「観念(idea)」の起源を問い、我々の心の中に生じるあらゆる意識内容を「印象(impression)」に還元した。「観念」は薄まった「印象」である。つまり、人間の心に現れる意識内容(知覚)は、「印象」と「観念」に分かたれ、「これら二つの間の相違は、これらが心に働きかけ、思考もしくは意識の内容となる時の勢い(force)と生氣

(liveliness) との程度の違いにある」<sup>5)</sup>。そこで問題になるのは、いかにして、このような個々の「印象」や「観念」が取りまとめられ、一つの意味のある意識内容として結合されるのか、ということである。ヒュームによれば、「類似」「時空的近接」「因果関係」の三つが「連合 (association)」の法則として働く。とりわけ、「因果関係」は類似や近接といった直接的なものを超えたところ (たとえば未来) へわれわれの意識を導く点において、特筆すべき役割を果たしている。「因果関係だけが、見もしないし触れもしない存在について告げるただ一つの関係」である。因果関係という「観念連合 (association of ideas)」の法則が、記憶や現在の印象を超えた、いまだ経験されていない未来へと我々の経験をつなぐ。そのつなぐ力とは何か。これこそが想像力にほかならない。ヒュームはこの想像力の作用を「秘密の作用 (a secret operation)」と呼び、人間本性に由来するものと考えた。

このように、ヒュームにおいては、人間本性の「秘密の作用」としての「想像力」が、とくに、因果関係という観念連合の法則においてはたらき、未来の経験的認識を成立させるという理解がなされている。最初に挙げた例で言えば、「(洗面所に行けば) 歯磨き粉があるだろう」という認識の成立には想像力の発揮が不可欠であるということにあるだろう。すなわち、先取、未来の認識という契機における想像力の発動が無ければ、われわれは、階段に一步を踏み出すことさえできないのである。われわれは、現在とともに未来を先取りしながら、かろうじて日常的な認識を可能なものとしている。

### サルトルにおける「想像力 (imagination)」

つぎに、J.P.サルトルの議論を援用して、過去における経験的認識、すなわち、想起とその認識的活用場面における想像力の根源性について考えてみたい。

さて、シンプルな命題から始めてみよう。「この世界に『無』はあるのだろうか?」。これは、設問からして、矛盾していることかもしれない。無が存在とは、ないことがある、とっていることに等しいからである。

しかし、私の問うているのは、そういう意味ではなくて、日常的なレベルで使う「何々がない」という表現は、そもそもどういうことを表しているのだろうか、ということである。当然だが、この世界には在るものしか存在しない。存在するものは存在し、

存在していないものは存在していないのである。

ところが、われわれは、「歯磨き粉がない」と言うし、「醤油がないから買ってこなければならぬ」とか、「この部屋には誰もいない」とか、「無い」という概念をしばしば使用している。これは、人間が可能性として在る／在ったものを想定して、それが、「無い」と言っているのであって、「世界」の側には、つまり対象としては、否定という事態は存在していないのである。

このように、人間の心の中で、初めて、「無」が誕生すると言いうことができるであろう。「醤油が無い」のは、醤油が入っていた空のペットボトルが「在る」だけであって、醤油が「無い」のではない。おなじく、「この部屋にはだれもいない」ときは、机と椅子だけが置いてある空間が「在る」だけであって、誰かが「いない」わけではない。

こうして考えると、「無」という観念は、すぐれて人間の想像力の所産であるということがわかる。人間の想像力なくしては、在る世界をあるがままに受け止めるしかなく、ゆたかな意味をもった「世界」の広がりには、ただの物体の集まりになってしまうであろう。

サルトルは、ヒュームやカントとは異なった意味で、「想像力」を哲学の中心的テーマとした。彼の言う「超越」や「無」という概念そのものが、想像力の問題にほかならないのである。

人間の意識は、知覚がそうであるように、何ものかの意識として、現実の事物を志向しているが、同時にこの意識のあり方それ自体を自己否定し、現実界全体を超越することができる。この否定と超越は、意識の本質構造をなしているが、その働きは意識の「非現実化」の作用として、想像力の所産である、というのがサルトルの意見である。「否定作用は想像力のうちにおいてのみ、また、想像力を通してのみ、実現可能である」<sup>6)</sup>。

またサルトルは、人間の意識を「知覚」と「想像力」とに二分し、両者を種的に区分している。すなわち、「知覚」は常に目の前の事物に結びついて現実的世界を志向するのに対して、「想像力」はもっぱら「イメージ (像)」を喚起する機能として、知覚とは反対に、目の前の現実を離れ、非現実的世界を志向することによって、対象の不在性を告知するところに特徴がある。そして、その想像力の喚起する「イメージ」の特徴として、以下の4点をあげている。

①イメージは、単なる幻影でも心的錯覚でもな

く、意識の対象への関係を示す概念である。つまり、対象が意識にあらわれる特有な仕方、あるいは、意識が対象を自らに与える固有な仕方のことである。

②イマージュは常に直感的な事柄であって、一挙にその対象の中心に身をおく。これに対して、知覚においては、たとえば正六面体の場合、対象は知覚されたそれぞれの側面を連続的に合成するという手続きをとって、その見えない部分が補われる。したがって、知覚は、いわば「射影」の順次的連続の合成物なのである。

③知覚は対象を現存するものとして措定するが、イマージュは対象を、「非存在」としてあるいは「不在」として、あるいはどこかほかのところに存在するものとして措定する。イマージュはどんなに活気にあふれ、力強いものであろうと、おのれの対象を存在せぬものとして与える。イマージュは「不在的—直観的」であり、ある種の「無」を内包している。

④知覚的意識は受動的であるが、想像的意識は、イマージュの対象を産出し、かつ保っておくという自発性をもつ。

これら特徴のうちで、重要なのはやはり③の、イマージュは「不在的—直観的」であり、ある種の「無」を内包している、という点であろう。

そもそも、世界を無の観点で見るとは、現実界が世界として構成される作用のうちに、すでに含まれているように思われる。これが意識の構造である。サルトルが言うように、このイマージュの「無化」という特徴は、想像力のすぐれて重要な機能であり、これなくしては人間の認識は成立しない、重要な能力と考えてよいだろう（ただし、サルトルに言わせればそれは自由の問題につながる実践論的課題なのであるが）。

さらに、イマージュの「無化」という想像力の機能は、「過去の経験的認識」の成立に必要なものであるといえるだろう。「知覚は対象を現存するものとして措定するが、イマージュは対象を、『非存在』としてあるいは『不在』として、あるいはどこかほかのところに存在するものとして措定する」場合、「非存在」あるいは「不在」として措定される対象は、「過去にあった」ものとして経験されたものである。「無い」という認識は、本来あるべきところに「無い」という認識でもある。本来ある、というのは過去の認識と表裏一体である。未来は、ある意味で「非存在」あるいは「不在」であるが、それも、「非存在」あるいは「不在」の類推にすぎないと考えられる。

端的に「無い」と直覚できるのは過去のみであり、そういう意味で「非存在」あるいは「不在」は過去の認識の成立を表している。

われわれの認識の基礎となる過去からの「積み上げ」すら、想像力という契機が存しているということは、サルトルの現象学的・実存主義的議論からも明らかにされている。

### カントにおける「想像力」（「構想力」）： 現在の認識あるいは、いまここの認識と 意識の成立

カントは、「想像力」という術語のかわりに「構想力（Einbildungskraft）」ということばを用いている。定義によれば、「対象が現前していなくてもこの対象を直観において表象する能力」<sup>7)</sup>となるが、さしあたり「想像力（imagination）」とほぼ同義のものとして理解してよいだろう。

さて、カントもヒュームと同様に、構想力（ヒュームにおける想像力、以下説明省略）を、「人間の心の根本能力」「それを欠いては我々はまったく認識を持ち得ないであろうところの、心の盲目的な、にもかかわらず不可欠な機能」とみなし、人間の認識論的側面においてはたすその重要な役割を認めている。カントにおいても、構想力（想像力）は、非現実的な空想や錯覚をもたらす元凶ではなく、むしろ、認識において積極的な役割を演じる重要な機能を有する重要な能力であった。

では、カントによって「心の根本能力」「認識に欠く事ができない能力」とされた、この構想力とは、いったいどのようなものであるか。ここでは、『純粹理性批判』における記述を確認しておこうと思う。

「構想力は知覚そのものの必然的構成要素である、ということに考えついた心理学者はこれまで一人もなかった」<sup>7)</sup>。『純粹理性批判』の第1版「純粹悟性概念の演繹」の脚注においてカントはこのように述べている。

「構想力」とは、カントにとっては、諸事象の間に親和性を認め連想によってある形象を二次的・再生的に形づくるものであることにとどまらず、むしろ、そうした経験的働きの根底にあって、直観の多様を把捉し、はじめて一つの形象にまとめあげる「根源的な能力」にほかならなかつた。カントはその能力を「産出的（produktive）」構想力と呼んで、「再生的（reproduktive）構想力」と区別した。そして、「アプリオリな総合の能力」による必然的統一という

「構想力のこの超越論的機能を介してのみ、諸現象の親和性すら、それとともに連想も、最後に、この連想を通じて、諸法則にしたがう再生産も、したがって経験自身も、可能となる」と説いた。

構想力はさらに、「超越論的時間規定」としての「図式」を産出し、感性与悟性の媒介・統一に当たって不可欠な役割を演ずる。

カントによれば、「あらゆるアプリアリな認識の根底に存する人間の心の根本能力として、我々は純粹構想力を有している。これを媒介にして、我々は一方にある直観の多様を、他方にある純粹統覚の必然的統一の制約と結合する。感性与悟性という両極端は、構想力のこの超越論的機能を媒介として必然的に連関しなければならない」<sup>7)</sup>。

そして、構想力は、経験的認識の基礎となる「図式」を作り出す。構想力 (Einbildungskraft) とは、その原語通り、「像 (Bild)」を作る能力 (Kraft) なのである。「図式 (Schema)」とは、像を像として認識するために必要な「形 (かた)」である。われわれは、図式なしには、対象を一つ概念にまとめあげることが不可能である。たとえば、一つの「皿」という経験的対象は「円」という純粹に幾何学的な形像と同種の性質を持っているが、それは、「皿」というものに見られる「円さ (丸さ)」の概念が、円において直観されているからである。そもそも、「図式」は、カントにとって、現象に対するカテゴリーの適用可能性を問うときに必要とされたものであったが、構想力の所産であるこの図式は、現象とカテゴリーを媒介する (現象にカテゴリーを適用する) 際の「第三のもの」として、概念を感性化する際の不可欠な条件となっているのである。カントは、このような図式に従って悟性が作用することを「図式性 (Schematismus)」と名づけた。そして、この「図式性」は、「人間の心の深みに潜む隠された技術である」と述べるのである。

すでに述べたように、カントは経験的認識の根底にあって、直観の多様を把握し、はじめて一つの形像にまとめあげる「根源的な能力」を「産出的 (produktive) 構想力」と呼び、単なる「再生的 (reproduktive) 構想力」と区別した。産出的構想力は、経験に先立って自発的に働くことにおいて、とらわれない自由を持つ。すなわち、経験的直観がなくとも、「図式」「形像」を自由に形成するのである。ただし、自由とは言っても、構想力が妄想や錯覚、あるいは単なる空想と異なるのは、常に「図式」を

産出し、それを介して常に「形像」にかかわり、現実に形像化することを迫られている点にある。すなわち、構想力は「直観の多様を一つの形像へともたらさねばならない」のである。

このようにして、カントにおいては、構想力は (とくにそのうちの産出的構想力は)、「図式」を産出し、その「図式」によって「形像」をもたらす点に重要な認識論的意味を与えられている。一定の規則性を持ちつつ、とらわれない自由を持って、「図式」を産出し、形像をもたらす。このことにより、人間は初めて一定の意味のある (総合・統一された) 認識を持つことができるのである。そして、ここにおいてははじめて、過去から現在、そして直近の未来における経験的な認識、そしてその連続性、さらに、それらを時間において統一する意識 (すなわち自我) が成立するのである。

カントにおける構想力 (想像力) の認識論における位置づけは、きわめて重要である。未来や過去の経験的認識にとどまらない、「いまここ」 (現在) の「目の前のこれ」の認識においてすらも、構想力 (想像力) の発揮が必要であるとの理解、さらには、過去から未来にわたる一貫した意識の流れが想像力 (構想力) の生み出す、図式によってなされているとの理解は、想像力の根源的な性格を浮き彫りにしている。

## 結 語

ヒューム、サルトル、カントの議論を手がかりにして、想像力 (imagination) (カントの場合は構想力 Einbildungskraft) の認識論的機能について考察を行ってきた。

その結果、日常的な経験的認識において、想像力は多様かつ根源的・根本的機能を果たしていることが理解された。芸術的あるいは道徳的な能力としてだけでなく、未来の認識、過去の認識、さらには、現在の目の前の事物の認識に至るまで、想像力の発揮はその成立における絶対的必要条件になっている。

カントの言うところの「対象が現前していなくてもこの対象を直観において表象する能力」としての想像力は、「現前していない」未来や過去のみならず、目の前の事物の実在性の認識を確保する機能すら担っている。

思考や判断、日常的な経験的認識まで含む根源的な能力としての想像力は、近代の哲学史を跡付けることにより、その認識論的意義が確認された。ジョ

ンソンとともに、想像力とは、人間の諸能力のうちでも、もっとも根源的な能力のひとつであると結論付けてよいだろう。

しかし、最後に、課題は残されている。カントの想像力論の根本原理は、感性と悟性をつなぐ第三のものとしての図式性にあった。すなわち、そこには、認識論的、あるいは存在論的二元論が前提とされているのである。そうするならば、第三のもの（悟性）や第二のもの（感性）はいかに接続されているのか、という循環論的なアポリアに必然的に導かれてしまうことになる。

カントは、晩年に近い1790年にあらわした『判断力批判』において、その解答の糸口を示した<sup>8)</sup>。しかし、いまだに哲学的議論における二元論は克服されていない。ジョンソンらがしめす一元論も、十分な検討は始まったばかりで、その正当性はまだ証明されていない。

われわれの目指すべき方向性としては、カントの二元論的発想をいかにして一元論的解釈に接続するか、という実に困難な問題へと立ち向かうことであるが、近年の分析哲学は、それを言語の分析や神経科学などとの親和性の強い「自然主義」へと「回避」している。「回避」ではなく、困難なこの問題に直に取り組むことでしか、人間の認識の根源的性格を理解することはできないだろう。あえてこの道を選ぶか、それは、その人の目指すべき人間理解の深さによるものだと、私は信じる。

## 引用文献

- 1) Mark, Johnson : The Body in the Mind/ The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason. University of Chicago Press (Chicago), 139-172, 1987.
- 2) George Lakoff and Mark, Johnson: Metaphors We Live By. University of Chicago Press (Chicago), 1980.
- 3) R.デカルト (井上庄七・森啓訳) : 省察. 中央公論新社 (東京), 23-134, 2002.
- 4) Hume, David (Edited by Beauchamp, T.L.): An Enquiry Concerning Human Understanding. Oxford University Press (New York), 96-107, 1748/1999.
- 5) Hume, David (Edited by Norton, D.F. and Norton, M.J.): A Treatise of Human Nature. Oxford University Press (New York), 116-137, 1740/2000.
- 6) J.P.サルトル (平井啓之訳) : 想像力の問題 (サ

ルトル全集第12巻). 人文書院 (京都), 14-90, 1955.

- 7) Kant, Immanuel (Edited by Schmidt, Raymund): Kritik der reinen Vernunft. Felix Meiner Verlag (Hamburg), 105-308, A1781/B1787/1956.
- 8) Kant, Immanuel (Edited by Vorlander, Karl): Kritik der Urteilskraft. Felix Meiner Verlag (Hamburg), 105-308, 1790/1974.

## 参考文献

- 1) M.ジョンソン (菅野盾樹・中村雅之訳) : 心のなかの身体～想像力へのパラダイム転換, 紀伊國屋書店 (東京), 1991/1993.
- 2) G.レイコフ, M.ジョンソン (渡部昇一他訳) : レトリックと人生, 大修館書店 (東京), 1986.
- 2) D.ヒューム (斎藤繁雄・一ノ瀬正樹訳) : 人間知性探求, 法政大学出版局 (東京), 2000.
- 3) D.ヒューム (土岐邦彦訳) : 人性論『世界の名著27』, 中央公論社 (東京), 1968.
- 4) I.カント (篠田英雄訳) : 純粹理性批判 (上), 岩波書店 (東京), 1961.
- 5) I.カント (篠田英雄訳) : 純粹理性批判 (下) 付録「第1版」, 岩波書店 (東京), 1961.
- 6) I.カント (宇都宮芳明訳) : 判断力批判 (上), 以文社 (東京), 1994/2004.
- 7) I.カント (宇都宮芳明訳) : 判断力批判 (下), 以文社 (東京), 1994/2004.
- 8) 細谷昌志 : カント 表象と構想力, 創文社 (東京), 1998.
- 9) Dancy, Jonathan and Sosa, Ernest (Edition): A Companion To Epistemology. Blackwell Publishing (Oxford/UK), 1992/1993.

# The Epistemological Function of Imagination

Hiroyuki Harada

## Abstract

In this article, I would try to elucidate the function of human imagination in epistemology. In general usage of the term "imagination", most people think it is a kind of power for an artistic performance or a moral sense. On the other hand, beyond the importance in general usage or meaning, imagination has important functions in epistemology.

It will become clear in modern philosophers' argument, in theory of knowledge or judgment of David Hume, Jean-Paul Sartre and Immanuel Kant. Especially in Kant's account of imagination, I claim that its productive and schematizing functions are essential for human knowledge in tense (past, present and future) cognition. In other words, all cognition occurs in time and thus is subject to the structure of temporality.

Yet there is a limit in Kantian theory. Whether we can obtain a richer view beyond Kant or not depends on how we can solve the problem with dualism in epistemology.

Keywords: Imagination, Cognition, Human knowledge, Schematism, Temporality